



「事象 A（保護者が起こした体罰対抗行動）と事象 B（被告石上による児相通告）が独立に発生する」という仮説の下で期待されるデータをシミュレーションにより 1,000 セット作成した。シミュレーションの条件は以下の通り：

1. 観察期間：平成 23 年 11 月 29 日～平成 25 年 5 月 1 日の 519 日間
2. 事象 A 発現日：実データと同日（4 日）
3. 事象 B 発現日：観察期間（519 日間）から無作為に 6 日を抽出
4. シミュレーション回数：1000 回

実データにおける直前の事象 A 発現日から事象 B 発現までの経過日数の中央値は 23.0 日と推定されたのに対し、シミュレーションデータでは 111.0 日と推定された。事象 A と B が独立（無関係）であると仮定したシミュレーションデータに比べて、実データにおいてはより早期に事象 B が発現したことを示唆している。

さらに、Log-rank 検定の結果、実データとシミュレーションデータに有意水準 5%で、高度に有意な差が認められた（ $P=0.00000005$ ）。つまり、事象 A と B が無関係で起こる確率は、わずか 2 千万分の 1 にすぎない。これは、サイコロを 9 回ふって、連続して 9 回とも 6 の目が出続けるよりも低い確率である。

ゆえに、事象 B（被告石上による児相通告）は、事象 A（保護者が起こした体罰対抗行動）に起因して発生しているものと推察される。